

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 30 日現在

機関番号：34405

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24656363

研究課題名(和文)モダニズム建築のオーセンティシティに関する研究：オランダ等の保存再生事例を通じて

研究課題名(英文) A Study on the Authenticity in the Modern movement Architecture: a case study on the restoration and revitalizations of the modern movement architecture in the Netherlands and other Western countries

研究代表者

奥 佳弥 (KAYA, OKU)

大阪芸術大学・芸術学部・准教授

研究者番号：20268577

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：1920年代から60年代にかけてコンクリートや鉄、ガラスなどを用いて建設された、いわゆるモダニズム建築の保存・再生の際に問題となるオーセンティシティの概念に着目し、そのあり方について、オランダなど欧米における事例を調査し考察・分析した。
その結果、モダニズム建築の保存・再生は、従来重視されていた材料のオーセンティシティを守るのが難しく、新たに設計者の意図や透明性といったモダニズム建築特有のオーセンティシティが重視されている傾向にあること、従来ヨーロッパで忌避されてきた復元(再建)もしばしば行われていることなど、モダニズム建築の保存・再生に特有の問題が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We investigated and analyzed the modern movement architecture, built of reinforced concrete with large glass surfaces from 1920s to 1960s in the Netherlands and other Western countries, focusing on the concept of the 'Authenticity' which is an important subject on the restoration and revitalizations of them.
Through these studies, we defined the problems and difficulties peculiar to the restoration and revitalizations of the modern movement architecture, that have arisen from the tendencies attaching greater importance to original intention of architect and transparency of large glass surfaces than to the 'Authenticity' in materials, which has been taken one of the most important subjects as well as the evasion of reconstruction in the restoration and revitalizations of traditional architecture in Europe.

研究分野：近代建築史

キーワード：モダニズム建築 保存 再生 改修 オーセンティシティ オランダ 欧米 近代産業遺産

1. 研究開始当初の背景

近年日本では、装飾を排除しコンクリートや鉄、ガラスなどを用いて1920年代から60年代にかけて建設された、いわゆるモダニズム建築の保存・再生事例や計画が多数発生している。今後こうした事例はますます増加することが予想されるが、木造の日本建築やレンガ造の近代建築と異なり、モダニズム建築の保存・再生の理念や方法は確立されておらず、その指針や議論が不十分なまま、事業が進められる傾向にある。

一方オランダは、1988年にモダニズム建築の保存に関する国際組織DOCOMOMOを設立し、いち早くその保存・再生の理念や方法を検討してきた。そうした中で、近年モダニズム建築のオーセンティシティの確立が課題となっている。オーセンティシティとは「真正性」などと訳され、建築を保存・再生する際に指針となる建物の歴史的価値のことを指す。近代以前のヨーロッパの石造建築では素材のオーセンティシティが重視されたが、モダニズム建築ではデザインや空間、設計者の意図などのオーセンティシティが重視されつつある。

2. 研究の目的

本研究は、いわゆるモダニズム建築の保存・再生にあたって指針となるオーセンティシティ（真正性）の概念に着目し、そのモダニズム建築特有のあり方や問題点について整理、考察を行うものである。その際、国際組織DOCOMOMOを設立するなど近代建築の保存・再生の先進国であるオランダを中心としたヨーロッパの事例を対象として、具体的な成果や問題点を考察する。それによって、近年日本で事例が増えつつあるモダニズム建築の保存・再生のよりよいあり方を考える手掛かりにすることを目的としている。

3. 研究の方法

オランダを中心としたヨーロッパのモダ

ニズム建築のオーセンティシティの概念に着目しながら、保存・再生の理念や方法の成果と問題点について、文献調査や見学調査、インタビュー調査を通じて整理、考察を行った。その際オーセンティシティがいかに見出され、いかなる方法で保存・再生が実施されているか、具体的な問題を抱えている事例を考察した。加えてモダニズム建築の保存・再生に関する国や自治体の制度のあり方、DOCOMOMOの活動のあり方、研究者の研究方法など、モダニズム建築の保存・再生を取り巻く環境についても調査を行い、総合的にオーセンティシティや保存・再生の問題を明らかにすることを目標とした。

4. 研究成果

(1) オランダにおける保存・再生/改修

オランダは、1988年、世界に先駆けて、モダニズム建築の保存に関する国際組織DOCOMOMOを設立し、いち早くその保存・再生の理念や方法を検討してきた。そうした中、同国においても、近年モダニズム建築特有のオーセンティシティの確立が課題となり、デザインや空間、設計者の意図などのオーセンティシティが重視されつつある。

実際そのようなオーセンティシティの概念によって、修復・再生された例として挙げられるのが、2003年、柱とスラブ以外の躯体や素材が刷新されて建設当初の姿に戻されたことで議論を呼んだ、ダウカー設計の名作ゾンネストラール・サナトリウム(J. Duiker, Zonnestraal Sanatorium, 1928年)である。また、世界遺産に登録されているシュレーダー邸 (G.Th. Rietveld, Rietveld Schröder house, Utrecht, 1924) ではオリジナルの材料を一部取替えても、デザインのオーセンティシティを維持していることが確認された。

これらに対し、ファン・デル・フルフト設計の「ファン・ネレ」(Brinkman & Van

der Vlugt, Van Nelle Fabriek, Rotterdam, 1928)では、元工場をオフィスに改修しているが、モダニズム建築特有の全面ガラスのファサードを損なわないよう室内設計することで、オーセンティシティへの配慮と維持がなされていることを確認した。一方、1995年、J.J.P.アウト設計の「キーフック集合住宅」(J.J.P. Oud, Kiehook housing, Rotterdam, 1930)では、建物自体の不動沈下のため解体、再建されるといった事例も確認された。こうした、活用を前提としたインテリアの大幅な改修や、モダニズム建築に特有の大きなガラス面による透明性を維持した事例は、材料のオーセンティシティの維持ができない中、オリジナルの姿を保つ方法として再建も含めてオリジナルの姿を維持するさまざまな模索がなされていることを示している。

先の「シュレーダー邸」をはじめ、オランダ近代を代表する建築家リートフェルトの建築は、同国でも早くから多数の作品の保存・再生が行われてきたが、近年その際のオーセンティシティの捉え方をめぐって、複数の事例において問題や議論が生じている。例えば、「ヴィルヘンホフ墓地集会場」(G.Th. Rietveld, Wilgenhof Cemetery Auditorium, Hoofddorp, 1961)は、2007年、空港の滑走路建設のため解体されたが、オリジナルの素材を生かして再建するか否かが議論されないまま、別の場所で新規に再建され、問題視された事例である。さらに、オーセンティシティの概念が乱用された事例として、「ソンスベーク・彫刻パヴィリオン」(G.Th. Rietveld, Sonsbeek Pavilion, Ahnem, 1955)のように、解体の必要性を十分に検討しないまま、2009年、建物の老朽化を理由に解体、オリジナルの素材を廃棄し、翌2010年に素材を刷新したレブリカが生み出され、議論を呼んだケースが確認された。

(2) その他の欧米諸国における保存・再生 / 改修

ドイツにおける最近の保存・改修事例として、ドイツ北西部のルール地方、ツォレンフェアイン炭鉱業遺産群(Zollverein Coal Industrial Complex, Essen)に、近代産業遺産を活用して公園や文化施設を作りながら自然環境を修復し、雇用も創出する広域のまちづくり計画の在り方を確認した。またデュイスブルク市の「ランドシャフトパーク」(Landschaftspark, Duisburg-Noord)では、製鉄所および炭鉱の操業停止により使われなくなり廃墟化したほぼすべての産業施設をそのまま残しながら、大規模な公園に改修した事例を確認した。デンマークにおける最近の事例としては、オランダの建築家グループMVRDVによる改修設計により、コペンハーゲン港湾部の再開発地区に並ぶ2棟の穀物倉庫を集合住宅に改修した「フロシロ」(MVDVR, FRØSILO, Copenhagen, 2005)等について調査した。こうした近代産業遺産の活用事例はオランダでも多く確認されたが、日本では見られない大胆かつ多様な保存・改修の在り方が注目された。こと近代産業遺産は、工場や倉庫など機械や物資を保管するために作られたものであり、それを人間が活動するための空間に改修するには、光を大きく取り込んだり、小さな空間に分節するなど外観も含めて大きく改変せざるを得ない一方、内部ではもとの空間のもつ質を活用していることなどが明らかになった。

一方、アメリカでは、中西部に点在するやフランク・ロイド・ライトによる「落水壮」、「ロビー邸」、「ユニティ・テンプル」、ミス・ファン・デル・ローエによる「レイク・ショア・ドライブ・アパートメント」、「ファンズワース邸」、「IIT クラウン・ホール」などの20世紀を代表する近代建築や「シカゴ派の高層建築」等について調査した。同調査

により、アメリカではオランダ等に見られたモダニズム建築の保存・再生/改修の事例と比較して、材料や構造の材料や構造のオーセンティシティにより重点を置いた保存・再生/改修の事例が多く見られ、特に著名なモダニズム建築に関しては、可能な限りオリジナルの材料を忠実に残し、一般公開することにより、観光化している事例が多いことが確認された。

(3) 日本国内における保存・再生/改修

日本においても、2000年にDOCOMOMO Japanが設立されるなどモダニズム建築の保存・再生への関心は高まりつつある。とはいえ、モダニズム建築の保存・再生の際には、何を保存すべきかの理念や指針が定まらないまま、保存か解体か壁面保存かといった、紋切り型のわずかな選択肢の中で保存のあり方が議論され、社会的にも混乱が生じているという現状にある。

例えば、吉田鉄郎設計による旧東京中央郵便局(現・KITTE)では、正面のワンスパンだけを保存し、残りは高層化するという、大都市ならではの改修による壁面保存がなされ、日本特有の都市部での高層化によってオーセンティシティを残すことの難しさを示している。一方、オリジナルの状態を残しながら丁寧な増築が行われている例として「国際文化会館」(前川国男、坂倉準三、吉村隆正設計、六本木、1952年)が挙げられる。また、「八幡市立日土小学校」(松村正恒設計、愛媛県八幡浜市、1956、1958年)では、長年の保存活動を通じて再生/改修が実現し重要文化財に指定された、木造モダニズム建築の優れた事例の一つである。

「国際文化会館」「日土小学校」などは、オリジナルのデザインの質を維持しながらデリケートな改修および増築が行われた希少な例であるが、現代建築とデザイン的に類似するモダニズム建築と調和させながら差

別化させるというデリケートな問題を含んでおり、モダニズムならではの保存・再生/改修の難しさが確認され、活用を前提として、オリジナルの状態(オーセンティシティ)を維持することの難しさを示していた。

(4) まとめ

本研究では具体的な事例調査を通じて、オランダを中心としたヨーロッパにおける保存・再生の手法が多様で、国や市の文化財に指定されている建築でさえ必ずしも材料のオーセンティシティに拘わらず保存・再生された事例や、文化財としての価値を損なわずに大胆な用途変更が施され保存・改修された事例が数多く存在することが確認された。しかも、オランダの場合、それらは建築ごとに保存・再生の在り方について議論する場として個別の審査委員会が設けられ、多くの場合、十分な議論や厳正な審査の上で保存・再生あるいは改修が行われており、材料等のオーセンティシティの維持に代わる多様な評価軸をもって、モダニズム建築保存・再生/改修がなされていることが明らかとなった。

モダニズム建築におけるオーセンティシティの概念を検討、考察し、その概念を確立しようとすることは、日本においてよりよい、また現実的なモダニズム建築の保存・再生を可能にすることにつながると考える。またモダニズム建築のオーセンティシティは、日本の伝統的な木造建築のオーセンティシティの問題と似ている部分があるため、比較検討の余地がある。さらに日本には木造によるモダニズム建築も存在しており、オランダや欧米にはない、新たなモダニズム建築のオーセンティシティのあり方を検討することにもなるだろう。そこにおいて、従来にない新しい原理の発展や成果が期待できる。

本研究は、モダニズム建築の保存・再生のための基礎的な概念に関わるものである。その成果は、個別の建物の保存・再生のあり方

の指針を導くのみならず、国の文化財の理解の仕方や法制度の整備、また国民の理解の向上などにつながると考えられる。学術的な問題の検討にとどまるのではなく、社会的な問題の解決にも貢献するものであることを期待する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 29 件)

1) 奥佳弥

G.Th. リートフェルトの建築作品における地域性の表現について、デザイン理論、査読無、第 61 巻、2012、142-143

2) 笠原一人

建築保存のポリエードル 4 線形土木建造物の保存活用、建築ジャーナル、査読無、第 1198 巻、2012、26-27

3) 笠原一人

京都高等工芸学校本館、建築と社会/日本建築協会、査読無、第 1081 号、2012、21-24

4) 笠原一人

建築保存のポリエードル 5 給水塔の保存・活用、建築ジャーナル、査読無、第 1199 号、2012、pp.22-23

5) 笠原一人

建築保存のポリエードル 6 サイロの保存・活用、建築ジャーナル、査読無、第 1200 号、2012、pp.20-21

6) 笠原一人

美野丘小学校円形校舎、歴史と神戸/神戸史学会、査読無、第 292 号、2012、pp.2-6

7) 笠原一人

建築保存のポリエードル 7 ガスタンクの保存・活用、建築ジャーナル、査読無、第 1201 号、2012、pp.24-25

8) 笠原一人

建築保存のポリエードル 8 廃墟の保存・活用、建築ジャーナル、査読無、第 1202 号、2012、pp.22-23

9) 笠原一人

建築保存のポリエードル 9 炭鉱・製鉄所の保存・活用、建築ジャーナル、査読無、第 1203 号、2012、pp.20-22

10) 笠原一人

保存をめぐる評価指標の多様化 - オランダにおけるゾンネストラール・サナトリウムの修復とソンスペーク・パピリオンの再建から

考える -、2012 年度日本建築学会大会(東海) 建築歴史・意匠部門パネルディスカッション 資料「モダニズム建築の評価 - 保存のコミュニケーションをめぐる」、日本建築学会建築歴史・意匠委員会、査読無、2012、pp.13-20

11) 笠原一人

建築保存のポリエードル 10 庁舎の保存・活用、建築ジャーナル、査読無、第 1204 号、2012、pp.24-25

12) 笠原一人

建築保存のポリエードル 11 要塞の保存・活用、建築ジャーナル、査読無、第 1205 号、2012、pp.22-23

13) 笠原一人

建築保存のポリエードル 12 巨大工場の保存・活用、建築ジャーナル、査読無、第 1206 号、2012、pp.18-20

14) 笠原一人

建築保存のポリエードル 13 コントラスト、建築ジャーナル、第 1207 号、2013、pp.22-23

15) 笠原一人

建築保存のポリエードル 14 増築、建築ジャーナル、査読無、第 1209 号、2013、pp.22-23

16) 笠原一人

神戸市庁舎、歴史と神戸、第 296 号、2013、pp.24-28

17) 笠原一人

建築保存のポリエードル 15 室内化、建築ジャーナル、査読無、第 1210 号、2013、pp.24-25

18) 笠原一人

建築保存のポリエードル 16 減築、建築ジャーナル、査読無、第 1211 号、2013、pp.20-21

19) 笠原一人

建築保存のポリエードル 17 リファインング、建築ジャーナル、査読無、第 1212 号、2013 年、pp.24-25

20) 笠原一人

建築保存のポリエードル 18 ヘルツォーク、建築ジャーナル、査読無、第 1213 号、2013、pp.30-31

21) 笠原一人

建築保存のポリエードル 19 復元、建築ジャーナル、査読無、第 1214 号、2013、pp.20-21

22) 笠原一人
建築保存のポリエードル 20 修復、建築ジャーナル、査読無、第 1215 号、2013、pp.20-21

23) 笠原一人
建築保存のポリエードル 21 白化、建築ジャーナル、査読無、2013 年 9 月号、第 1216 号、pp.18-19

24) 笠原一人
建築保存のポリエードル 22 立体交差、建築ジャーナル、査読無、第 1217 号、2013、pp.20-21

25) 笠原一人
建築保存のポリエードル 23 テンポラリーユース、建築ジャーナル、査読無、第 1218 号、2013、pp.20-21

26) 笠原一人
建築保存のポリエードル 24 修道院の保存・活用、建築ジャーナル、査読無、第 1219 号、2013、pp.22-23

27) 笠原一人
本野精吾設計栗原邸(旧鶴巻邸) 建築技術、査読無、第 764 号、2013 年 9 月、p.175

28) 笠原一人
栗原邸にみる本野精吾のモダニズム、建築人、査読無、第 590 号、査読無、2013、pp.4-5

29) 笠原一人
新刊紹介：生まれ変わる歴史的建造物、DOI (デジタルオブジェクト識別子)、査読無、第 64 号、2015、pp.140-141

〔学会発表〕(計 7 件)

1) 笠原一人

旧ジョネス邸の保存と活用』、旧ジョネス邸を次代に引き継ぐ会、2013 年 6 月 15 日、「旧グッゲンハイム邸(兵庫県神戸市)」

2) 笠原一人

旧新歌舞伎座の保存と活用、関西建築保存活用サミット、2013 年 7 月 6 日、「まちライブラリー・大阪府立大学(大阪府大阪市)」

3) 笠原一人

文化遺産としての鴨沂高校校舎、鴨沂高校の校舎を考える会、2013 年 10 月 27 日、「鴨沂会館(京都府京都市)」

4) 笠原一人
複製技術時代の建築保存 - オランダにおけるモダニズム建築の修復と再建 -、media shop、2013 年 11 月 18 日、「メディアショップ(京都府京都市)」

5) 笠原一人

大学の教育プログラムによる近代建築の修復 本野精吾設計 栗原邸(旧鶴巻邸) 関西建築保存活用サミット、2013 年 11 月 24 日、「寺西家住宅(京都府京都市)」

6) 笠原一人

西脇小学校木造校舎の歴史的文化的価値と木造建築の保存活用について、西脇小学校の木造校舎を想う会、2014 年 2 月 11 日、「西脇小学校(兵庫県西脇市)」

7) 笠原一人

京都にみる近代建築の保存と活用、京都市景観・まちづくりセンター、2014 年 2 月 26 日、「京都市景観・まちづくりセンター(京都府京都市)」

〔図書〕(計 3 件)

1) 笠原一人、他

国書刊行会、村野藤吾のファサードデザイン、2012、176

2) 笠原一人、他

淡交社、関西のモダニズム建築、2014、352

3) 笠原一人、他

大阪歴史博物館、村野藤吾 - やわらかな建築とインテリア、2014、144

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥 佳弥 (OKU, Kaya)

大阪芸術大学・建築学科・准教授
研究者番号：20268577

(2) 研究分担者

笠原 一人 (KASAHARA, Kazuto)

京都工芸繊維大学・デザイン建築学系・助教

研究者番号：80303931